

『福祉亭』の取り組みについて

INITIATIVES OF "FUKUSHI-TEI"

下平真由*¹, 山腰真也*², 村川真紀*³

Mayu SHIMODAIRA, Masaya YAMAKOSHI and Maki MURAKAWA

In this study, Mieko Terada, will report on her efforts to create "Fukushi-tei", a place for the elderly and people living in the community. This case study is located in a shopping district in the Nagayama area of "Tama New Town" and provides a daily place for apartment complex residents and neighbors to stay and participate in society, and contributing to community development in the surrounding area by providing daily meals.

Keywords : Community Comprehensive Care, Community based, Multigenerational exchange, Life support in the elderly, Meal, Whereabouts,

地域包括ケア, 地域密着, 多世代交流, 高齢期の生活支援, 食事, 居場所,

1. 概要

本稿では、高齢者を対象とした定食屋・喫茶店の最初期から活動されていた寺田美恵子氏による、高齢者や地域住民の居場所『福祉亭』の取り組みを報告する。本事例は多摩ニュータウン永山地区内の商店街の一角に位置し（写真1）団地住民や近隣住民に日々の居場所や社会参画の場を提供しつつ、毎日の食事の提供から多摩ニュータウン地域のまちづくりに貢献している。

「福祉亭」は、既存建物の一部（1階部分）を利用し、定食屋・喫茶店・毎月のイベントの実施を行っている。また、地域に住む高齢者の居場所としての拠点機能も持つ。さらに、近隣住民の困りごとの相談や解決に向けた取り組み（足の不自由な方に対して毎日の定食の配達や薬局と連携した薬の配達など）を実施しているほか、近隣地区の中学校や高校に職業体験の場の提供も行っている。

■基本情報（表1）

正式名称：福祉亭

施設規模：

地上2階建ての既存建物のうち、1階部分を利用

所在地：

〒206-0025 東京都多摩市永山4-2-3-104

運営事業者：特定非営利活動法人 福祉亭

設計監理：福祉亭とボランティア

敷地面積：多摩ニュータウン永山地区全体 約29ha

延べ床面積：約60㎡

構造：RC造

開所：2003年4月

開館時間：

月・火・水・木・金・土 10:00～16:00

（上記はコロナ禍での対応であり通常は17:00まで）

* 1 東京電機大学 未来科学部 建築学科

* 2 東京電機大学 未来科学部 建築学科

* 3 東京電機大学 未来科学部 建築学科 研究員

*1 Undergraduate Stud., Dept. of Arch., School of Sci. and Tech. for Future Life, Tokyo Denki Univ.

*2 Undergraduate Stud., Dept. of Arch., School of Sci. and Tech. for Future Life, Tokyo Denki Univ.

*3 Research fellow, Dept. of Arch., School of Sci. and Tech. for Future Life, Tokyo Denki Univ., Dr.Eng.

表1 拠点概要

所在地	東京都内	敷地図	
延べ面積	約60㎡	敷地面積	多摩ニュータウン永山地区 全体の面積約2.9ha
建物規模	地上2階建てのうち 1階部分を使用	構造	RC造
運営主体	特定非営利活動法人 福祉亭 ボランティアスタッフ	開所年月	2003年4月
受付日時	月曜 (10:00-16:00) 火曜 (10:00-16:00) 水曜 (10:00-16:00) 木曜 (10:00-16:00) 金曜 (10:00-16:00) 土曜 (10:00-16:00) 定休日: 日・祝	外観	
スタッフ	中核となる役員 9人 他ボランティアスタッフ	提供内容	●定食の提供 →昼食だけでなく軽食やアルコールも ●居場所の提供 →囲碁や将棋、読書など自由に利用 ●毎月のイベント ●困りごとの相談 →足の不自由な方へ食事や薬の配達 →家具の移動 ●近隣中学校 / 高校に職業体験の場の提供
対象	主に多摩ニュータウン永山地区 に住む高齢者 その他周辺地域に住みアクセス が可能な方 / 周辺の学校に通う 子ども / 子育て世代	利用状況	●一日あたりの平均利用者数は約40人程 →天候や季節の影響が大きく増減する →毎月の催しを自当で利用する人が多い →年間延べ1万2000人以上が利用する ●施設の利用は利用者に留まらず、ボラン ティアとしての利用も多く、現在まで約1 00人以上が登録をしている ●多摩ニュータウン永山地区に住む高齢者 の居場所が開所当初の構想だったが、今で は「三世代に利用される場」となり高齢者 のみ、地域内の住民のみの利用の場ではな くになっている。 多摩ニュータウン永山地区内の商店街の空き店舗を活用 している。商店街にはスーパーや食事処、クリーニング 、クリニックなど様々な業種の店舗が並ぶ。 商店街の前には広場があり、休日は近隣住民で賑わう様 子が見られる。

スタッフ：役員9人、他ボランティア

提供するサービス：

- ・定食、カフェ、居酒屋など食事の提供
- ・食事の配達、日々の生活の困り事解消等の在宅支援事業
- ・地域包括支援センターや、「ネコサポ^{注1)}」との連携による相談窓口
- ・定期的な医療、介護、日常的な娯楽に関するイベント
- ・毎月独自に発行する「いきいき新聞^{注2)}」による情報発信

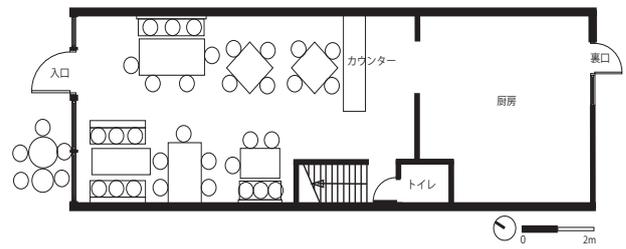


図1 平面図



写真1 商店街内の福祉亭

2. 設立の経緯

2.1 設立の背景

世界最速で高齢化が進む街とされる多摩市は「住み慣れた街で高齢者が豊かに暮らし続けるには」を模索していた。中でも多摩ニュータウン団地は高齢化が顕著に表れており、初期入居を中心に高齢者の孤立や孤独死が顕著化していた。更に団塊世代が一斉に定年退職を迎え、それにより起こる「二〇一〇年問題^{注3)}」の対策から、高齢者の生きがいつくり、居場所づくりの「場」として「福祉亭」が構想された。

2.2 設立の経緯

「二〇一〇年問題」で一斉退職をする団塊世代の方は職場という居場所を離れ新たな居場所が必要であり、新たな生活の拠点、近隣住民との交流や食事の場として福祉亭の利用が考えられていた。これを踏まえ、2001年に「多摩市高齢者社会参加拡大事業運営協議会」が発足され、福祉亭は同協議会からの委託という形式で運営が行われていた。その後、2003年に「NPO法人福祉亭」が設立され現体制での運営が開始された。周知を行う際に、2003年の立ち上げ当初はインターネットの普及が進んでいなかったため、テレビやラジオなど

のメディアのほか、独自に発行する新聞など^{注4)}を利用して広報活動を行った。

このような経緯のもと、地域の高齢者に向けた活動から多摩ニュータウン地域のまちづくり事業までを担う福祉亭は地域活性化のため、地域の他団体と連携を図りながら高齢化した街に必要な社会資源の活用や足りないサービスの発見、生活上の困りごとの対応を行っている。

3. 活動内容や取り組み

■主な活動内容 2003年の運営開始から現在(2021年12月6日見学時)まで、喫茶店、定食屋、赤提灯のない居酒屋、碁会所、高齢者サロンなどの様々な顔を持つ施設(写真2)として地域住民に利用されている。中でも、福祉亭では「食で繋がるコミュニティ」を題して毎日の定食の提供や食事の配達など「食」の面でのサポートに最も力を入れて行われている。特に、毎日11時～13時に行われるワンコイン(500円)での定食提供(写真3)を中心に、福祉亭で一緒に食事

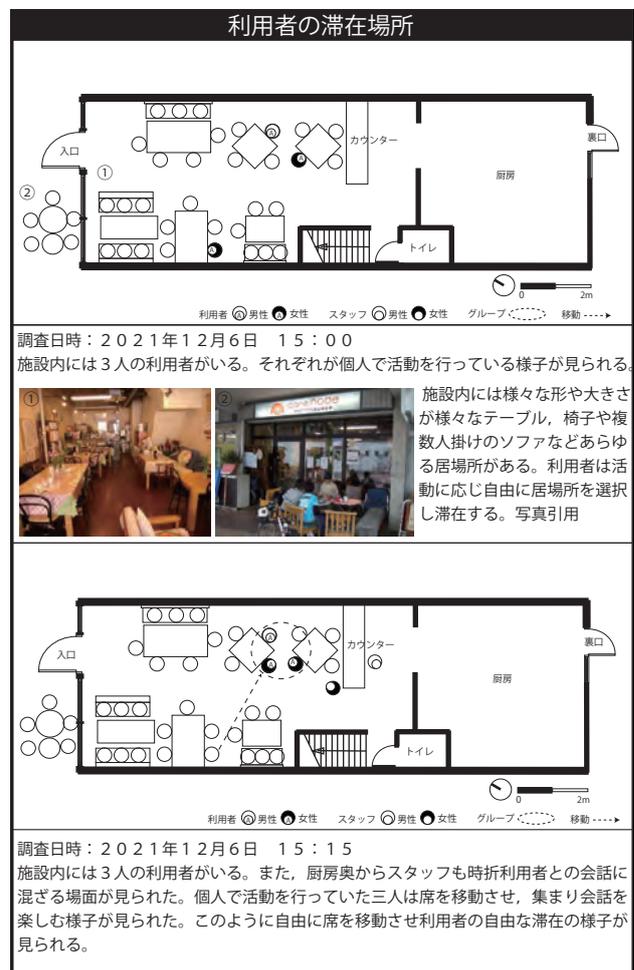
表2 利用者の滞在場所、滞在の様子



写真2 施設内の様子 (コロナ対応以前)



写真3 提供される昼食 (例)



やお茶をすることで、お互いに顔の見える関係を広め、地域での孤立を防ぐ居場所づくりの手助けとなっている。

■開催されるイベントやプログラム 生活の拠り所として運営される福祉亭では、毎月多様なイベントが実施されている。イベントの内容は、落語や囲碁、将棋、麻雀、介護予防体操などの定期的に行われるイベントに加えて、季節に応じて、お花見やウォーキングなどがある。月間の催事予定は福祉亭が独自に発行する「いきいき新聞」で告知されている。また、周辺地区の中学校や高校からは職場体験の場としても利用されている。職場体験で訪れる中高生は、施設の運営に携わるボランティアスタッフとして働き、利用者との世代間交流の機会にもなっている。

■生活の困りごとの相談受付 高齢期の地域での暮らしは、生活の中での行為が加齢とともに様々な理由で困難になる場合がある。その際に、福祉亭では生活の困りごとに対する相談、そしてその解決に向けた様々な取り組みが行われている。具体的には、足の不自由な住民の元に毎日定食の配達を行う、薬局と連携を図り薬の配達を行う、清掃、家具の移動などが挙げられる。近年、商店街にあらたに「ネコサポ」が設立され、困りごと解決の取り組みは分担されている。

■コロナ禍での活動や運用の変化 以前は赤提灯のない居酒屋などの活動で夜間まで運用していたが、現在は時短（10時～16時）で運用している。また、感染対策のため、着座の間隔を保てるよう席数を減らし、アルコール消毒やアクリル板の設置などを行って活動内容は大きく変えずに運用を続けている。

4. 建物や家具について

建物は、多摩ニュータウン永山地区の商店街内にあ



写真4 施設前の広場

る空き店舗が活用されている。内装は近隣の大学卒生等と共にデザイン、計画が行われた。内部には、様々な形や大きさのテーブル、一人掛けの椅子から複数人掛けのソファまでを組み合わせて、あらゆる居場所が設けられている。(図1) 見学時には、利用者が活動に応じて自由に席を移動する様子や、隣のテーブルに座る顔見知りでない利用者とも会話をするなど、多様な滞在や交流の様子が見られた。(表2)

5. 運営スタッフについて

■1日のスタッフの人数と業務 定食づくりや料理の提供、清掃などの業務に加え利用者の会話相手になる、利用者の相談に乗るといった業務が1日あたり5～6人程度のボランティアスタッフにより行われている。これらの運営には地域のボランティアスタッフが携わっており、のべ100人以上が福祉亭のボランティアスタッフに登録されている。ボランティアスタッフには昼食のまかないと交通費が支給されている。登録されているボランティアスタッフの中には、福祉亭での職場体験の機に登録をした中高生もいる。

■ボランティアスタッフについて ボランティアは基本的に最低限のコミュニケーションが取れる方なら誰でも、簡単な面談後にボランティアスタッフとして活動できる。福祉亭を利用する人の中には利用者側からボランティアとして運営側へ回る方もいる。そのほか、ボランティアスタッフの活動は、定食の提供・配達時間（11時～14時）のように忙しい時間帯のみの短時間の活動なども行われている。

6. 利用者について

■利用者層 主な利用者は多摩ニュータウン永山地区に住む一人暮らしの高齢者である。福祉亭の定食



写真5 外観

提供が高齢者の毎日の食事の手助けとなるため、特に一人暮らしの高齢者から支持されている。また、施設前に広場（写真4）があるため、近隣に住む子どもたちが広場で遊ぶ中で、ケガをして絆創膏を貰いに来る、喉が乾いたから水を飲みに来るなどして立ち寄る姿が見られる。ほかに、障がいを持つ方の利用やボランティアの活動もあるため、あらゆる世代や属性の方に利用されており（写真5）多種多様な交流の場となっている。

また、高齢化が進む多摩ニュータウン永山地区だが、近年歩車分離や高い緑地率の影響から若い子育て世代の居住の増加に伴い、若年層の施設利用者も増加の兆しがある。

■利用者数 2021年12月6日見学時時点では、コロナ禍のため利用者数は減少傾向にある。多い日で50人程、少ない日で35人程、毎日平均40人程の方に利用されている。コロナ禍以前は、年間延べ1万2000人程の方に利用されていた。利用者数の増減は天候や気候の影響を受けやすく、風が強い日は特に利用者が少ない。また、季節ごとの利用者数では、夏の利用者数が多く冬の利用者数が少ない。

■利用者の圏域 ほとんどは永山地区内の近隣住民だが、稀に他の市や多摩ニュータウン団地の他地区

から健康のためにとウォーキングがてら利用する方も見られる。

■利用者の多い時間帯 11時～13時の定食提供での利用が最も多い。

7. 地域や他施設との連携について

■商店街との繋がり 福祉亭は、商店街の空き店舗が活用されているため、近隣店舗だけでなく商店街全体での関係性が生まれている。（写真6）商店街には地域包括支援センターやクロネコヤマトが運営を行う「ネコサポ」があり、生活相談業務などはこれらの機関と分担して行われている。相談内容は、住民からの依頼で商店街内の薬局まで薬を取りに行く、靴下や下着を代理で購入し住民に届けるなどがある。また、商店街内の病院の先生が昼食を食べに来られ、先生が直接福祉亭の利用者から相談を受ける場面などもある。

■多摩ニュータウン永山地区とのつながり 多摩ニュータウン永山地区内には保育園がある。福祉亭では保育園の前の花壇など植栽の手入れ、保育園でのイベントの告知ポスター（写真7）を福祉亭で掲示するなど活動が行われている。寺田氏は「直接的に意識をした繋がり」だけでなく「意識をしない繋がり」が発生し



写真6 商店街の案内看板



写真7 商店街の催事の告知看板

ている点が福祉亭の特徴だと考えている。

8. これまでの運営を通しての寺田氏の考え

福祉亭の運営に携わって 20 年になる現理事長の寺田氏は運営を通じて「様々な人と関わる機会が増え新たな発見や学び」があったと考えている。また、寺田氏は、当初「高齢者の居場所」と構想された福祉亭が開所から 20 年経った現在「三世代に利用される場」に変化したと感じている。利用者層の幅も広がり、高齢者に加えて、子育て世代と乳幼児、放課後の居場所として利用する小学生、職業体験で施設の運営ボランティアとして利用する中高生、施設の研究に訪れる大学生、ボランティアスタッフとして活動する障がい者などをはじめとしてあらゆる世代の方、様々な属性の方に利用されている。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に、篤く御礼申し上げます。なお、本研究は、科学研究費補助金(基盤 B)「利用縁」がちな福祉起点型共生コミュニティの拠点のあり方に関する包括的研究(研究代表者:山田あすか)の一環として行われました。

注釈

注 1) ネコサポとは、ヤマトグループが運営する地域密着型のサービスで、生活サポートサービスとコミュニティ・生活相談の「場」を提供している。地域の中で、生活者の暮らし全般を家族に近い存在としてサポートすることを掲げ、2016 年にスタートした。

注 2) いきいき新聞とは、毎月の利用者や、地域包括支援センターなどからの原稿を基に福祉亭が独自に発行し、地域住民の交流の手立てとして活用されている新聞紙である。福祉亭の催事の周知や、福祉亭からのメッセージの掲載にも役立っている。

注 3) ここでの「二〇一〇年問題」とは、戦後まもなくに第一次ベビーブーム(1947 年～1949 年頃)に誕生した人たちを団塊の世代と呼び、この世代を筆頭に一齐に定年退職を迎える年に様々な問題が想定されていたことから「二〇一〇年問題」と名付けた。

注 4) 福祉亭はテレビやラジオ、新聞など各種メディアで度々紹介されている。一例として、NHK(2004 年 4 月放送)「首都圏ネットワーク」、NHK ラジオ(2009 年 7 月放送)「深夜便 ころこの時代」読売新聞(2002 年 1 月掲載)「高齢者交流の場」など。

参考文献

- 1) 福祉亭 HP < <https://fukushitei.org/> >, (参照 2022.03.02)
- 2) NPO 法人 福祉亭 10 年のあゆみ ひろがれ, ひろがれ, 笑顔の輪: 2013 年 5 月発行 編集・発行: NPO 法人 福祉亭 10 年のあゆみ編集委員会
- 3) NPO 法人 福祉亭 10 年のあゆみ 資料編: 2013 年 5 月発行 編集・発行: NPO 法人 福祉亭 10 年のあゆみ編集委員会

4) 暮らしのネコの手サポート ネコサポ provided by ヤマトグループ <<https://www.kuronekoyamato.co.jp/nekosapo/index.html#sectionLocation>>, (参照 2022.03.03)

5) 地図引用 国土地理院 <http://maps.gsi.go.jp/index_m.html#17/35.620963/139.449286/&base=ort&ls=ort&disp=1&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>, (参照 2022.03.02)